

## 巻頭言——商品ではない任意無償性への敬意

### Preface: The Respect for Voluntary Gratuitous Act not as Commercial Goods

イリイチは最晩年の対談で次のように言っています。

「西欧社会の道具化の増大する鞏固化と手に手を取り合って、人が伝統的に無償と呼んでいたものに対する心遣いの欠落が進行しました。現代の一つの相は無償性の喪失であるというのがわたしの強い確信であり、…啓蒙主義と共に、哲学者は概して善の追求としての倫理やモラルについて語ることを止め、その代わりに徐々に価値評価できるものについて語るようになっていくからです。…美であり善である生は、まず何よりも無償の生であるという可能性、…。わたしにはこの世界で、自分が愛する人々と共に生きること以上に素晴らしい状況があるとは思えません。」

このくにおいても、任意な無償活動は継続困難であるというのは、多くの任意団体やNPO 団体が長続きせず、資金や支持の孤立無援によって衰退することからも明らかです。このくには公共の市民活動には任意の支援や寄付が集まらないので、世俗にはビジネスにならなければ活動は続かないといえます。何物も商品化されねばならず、コスト・パフォーマンスが求められます。ふるさと納税にみられるように、魅力ある物品の返礼という見返りのないことには支援も出資もしないのです。神社・仏閣にご利益のあるお賽銭は投げ入れても、目先の即時的見返りが無い美しい自然や歴史的文化物、芸術作品に、無償の私費寄付はありません。

要するに公共の仕事は行政依存で、自主的な公共活動はこのくには市民には受け入れられないようです。ビジネスでなければ私的趣味であって、公共の活動ではないと認識されるのです。市民活動も社会的共通資本の保全も行政依存では所詮、行政の補完やその下請けにすぎないのです。企業財団の助成は目的誘導的で自由度が少なく、あてにし過ぎるには問題があります。貧者の一燈であっても、社会的活動のために私費を出し合う必要があります。

有給職業に勤しむのはもちろんですが、せっかくの人生ですから、日々の暮らしを支える無給生業をもっと楽しみたいです。日常の営みに関して、誤解を恐れずにあえて率直に言えば、田舎人は都市生活に対して卑屈で、自由・平等・友愛および民主主義という近代精神についてよほど無頓着、すなわち無知です。都会人は田舎に対して高慢で、自然への畏敬を忘れて、田舎人に感謝せずにあまりに無恥です。田舎人は自然に寄り添い、自律して生業を楽しむことができ、伝統知を継承することを誇りに思っています。都会人は自然に近づくようにして、田舎人の暮らしぶりから学び、生業を少しでも取り戻して、楽しみを増やしてほしいです。さらに、都会人は田舎人の生活から得ている恩恵に感謝して、行政支援、生活保障を認知・合意してほしいものです。

沢山の希望が叶えられるように、微力を捧げます。  
(黍稷農季人)

